

絶対レンアイ包囲網

A y a k a & T e t s u y a

丹羽庭子

Niwako Niwa

termity



エタニティ文庫

目次

絶対レンアイ包囲網

5

書き下ろし番外編
絶対ケツコン包囲網

337

絶対レンアイ包囲網

『——以上、よろしくお願いします。』

望月綾香もちづきあやか

タン、とパソコンのエンターキーを押し、私はメールを送信した。それから凝り固まった背中をほぐすべく、両手をググッと上げて伸びをする。すると、そんな私の様子を見ていたらしい先輩から、早速声がかかった。

「どう？ 望月さん終わった？」

「あ、はい！ 先輩、確認お願いします」

私は提出書類をまとめ、先輩に渡した。四歳年上の綿貫郁美わたぬきいくみ先輩は、私の指導をしてくれる人で、とても頼りになる。彼女は机に並べた書類をザッと見てから、にっこり笑って、ある一部分に指先をトン、と付けた。

「ここ、去年の数字」

「あっ！」

「あとは大丈夫よ。それを直したら、今日はもう仕事上がりましょうね」

「はい！ ありがとうございます、先輩！」

急いで直し、保存する。これでいまやっている仕事の、一応の区切りはついた。また次の嵐が来るまで小休止できそうだ。

いま、私が作っていた資料は、来週から行われる『リーダー研修会』のためのもの。

リーダー研修会とは、新規事業計画を立てるにあたり、全国の支店でアイデアをまとめ、代表者を一名ずつ選出して本社で実施される社内コンペのことを言う。そしてそれは、二週間の短期決戦で行われる。前半の一週間は講師を招いて研修が、後半の一週間は研修参加者と審査員である本社の重役のみが出席できる極秘プレゼンが予定されている。

これは二年に一度行われるもので、コンペの優勝者には金一封が出るし、昇進の確約ももらえるそうだ。そして翌年度から本社勤務となり、先頭に立ってその企画を進めていくこととなる。更に、その企画者を送り出した支社にも、大きな恩恵おんけいがあるようだ。だから研修期間中は、本社全体がピリピリしていて緊張感に包まれている。

本社勤務の私は、その研修会の運営メンバーの一員に選ばれて以来、かなり神経をすり減らしながら仕事をしていた。

……といっても、私は事務というか、裏方の一員なのだけけど。私は関係各所への連絡、日程の調整や宿泊場所、会議室の使用予約、講師や食事の手配などを担っている。大学を卒業して以来、もう六年近く同じ部署にいるけれど、この研修会に直接関わるのは初めてだ。以前行われた時に、先輩の仕事を手伝い、それなりに手法は学んでいたからなんとかなっているけれど、無事最後まで乗り切れるか少々不安が残る。

「望月さん、変更できました？」

「はい、終わりました」

机の上に雑然と置かれた書類やカタログなどを片付けていたら、帰り支度を済ませた綿貫先輩が声をかけてきた。

「これから他部署の人と女子会があるんだけど、一緒に行かない？ 来週から忙しくなるから、その前に呑もうよ」

綿貫先輩は私が入社して以来、公私ともとてもよくしてくれている。地方から出てきた私にとってお姉さんのような存在で、仕事をする上での目標でもある。でも――

「ごめんなさい！ 今日日は『てまり』に行く約束をしてるんです」

「ああ、『てまり』に？」

「それに、明日はいつものトコに行くので、支度しない」と

「あー、あそこね、了解。それだけ気に入ってもらえたなんて紹介者冥利に尽きるわ。

うん、わかった、また今度ね。それにしても望月さん、今回の仕事、ほんとよく捌けてるよ。今度、成長のお祝いとして美味しいお酒を奢るね！

「ありがとうございます！」

手放して褒められて、なんだかこそばゆい。

じゃあね、と先輩は手をヒラヒラさせながらフロアをあとにした。私も机を整頓し終えたので立ち上がる。そして忘れ物がないか確認したあとバッグを肩にかけ、会社のエントランスに向かう。

周りにはちらほらと残業する人たちがいるため、小声で「お先に失礼します」と挨拶をして歩き出した。

いまから行く『てまり』は、会社の最寄り駅近くの、行きつけの小料理屋だ。入社当時、へとへとなりながら立ち寄ったところ、その店主と年齢が近いこともあって意気投合。以来仲良くさせてもらっている。店主は一人暮らしの私のために、作り置きできる料理のレシピを教えてくれたり、お弁当作りのアドバイスをくれたり、野菜をちゃんと食べなさいよと惣菜を持ち帰らせてくれたりする。

たまに綿貫先輩と行くこともあるけれど、一人で行くのが常だ。

すっかり通いなれた道を歩く。帰宅ラッシュの時間帯より少し遅いので、人の波は食事や呑みに行くのだろうか、賑やかな雰囲気になっていた。

少し歩くと、小さな看板が見えてくる。カフェを目印に大通りから脇道へと曲がり、数十メートル行つた先の、一階に雑貨屋が入っている建物の——その脇にある細い階段を上つたところ。言葉で伝えるには少々ややこしい場所に、『てまり』はある。

濃紺の暖簾をくぐり、引き戸をカラカラと開ける。すると、甘辛いたれの焦げる香りが漂い空腹を刺激する。その途端、お腹がきゅうつと小さく鳴った。

「綾ちゃん！ 待ってたよー！」

私が店内に入ると、カウンターのの中にいた店主がパッと顔を輝かせた。

「万理さん、こんばんは」

勝手知つたるなんとやらで、出入り口付近にあるレジ横のハンガーにコートを掛け、カウンターの一番端に腰掛ける。ここは私の定位置で、カウンターの中にいる万理さんと話がしやすいのだ。

カウンターのの上にある大鉢には、里芋の煮っ転がし、鯖の煮つけ、肉じゃが、ほうれん草としめじの胡麻和えなど、定番ものから季節のものまでずらりと料理が並ぶ。

「とりあえず生！ それから、そこにある胡麻和えと、秋刀魚の梅煮と、桜海老入りのだし巻き卵が食べたいです！」

「あら珍しい。いつもだつたら最初は『ガツツリ肉食べたい』って注文するのに」

店の壁に貼られたメニューの短冊を見ながら注文する私に、おしほりを持ってきた万

理さんは目を丸くする。

「へへ。だつて明日から一人慰安旅行ですもん。だから今日はちよつと軽めで」

「そうなの？」

「大きな仕事の準備がようやく終わったから、自分にご褒美ですよ」

話しながらも、万理さんはこんもりときめ細かな泡が載つたビールのジョッキと、秋茄子とシラスを煮た小鉢を私の前に並べる。今日のお通しは私の大好物で早速手を伸ばしたいところだけど、まずは――

「いただきます！」

ジョッキを持ち、ふわふわの泡に口を付けて黄金色の酒で喉を潤す。あつという間に半分まで呑んでしまい、喉越しの素晴らしさにふううつと息をついた。

「相変わらず、いい呑みっぷりね」

「ええ、このためだけに生きていますから！」

お酒を呑み始めた当初は、ビールなんて苦くてまずい！ と思つていたのに、いまでは欠かせないものになっている。

嬉々として呑む私に、万理さんは苦笑しながらキツチンに戻る。

私はいったんジョッキを置いて、箸を手に取り秋茄子をつまみつつ、明日のことを考えた。

一人慰安旅行――

行き先は綿貫先輩に紹介された民宿だ。数年前までは友人たちと行っていたのだけれど、そのうち彼ができた、結婚した、と一人ずつ都合が付きづらくなり、とうとう一緒に行けるメンバーがいなくなってしまった。しかし定宿じていじゆくにしていたその温泉と料理が大変好みで、えいと勇氣を出して一人で宿泊してみたら……ゆつくりと羽を伸ばせて快適だった。

それに気をよくして、思わず翌月の予約をその場で取ったほどだ。

それからは一人カフェ、一人ファミレス、一人ラーメン、などを次々と攻略し、行動範囲が広がっていった。いまでは一人居酒屋も行けるようになったので、日常が充実している。

やがて一人での行動は、時間の自由がとてまきくことに気付いた。

友人と過ごすのは楽しいけれど、日時をすり合わせ、食事などの場所もお互いの好みを探り……などは、一人での行動に慣れてくると正直ちよつと億劫おっくうだ。

とはいえ付き合いも大事にしたい、とランチやお茶など短時間で、友人と会うようにしていた。けれども最近では話題すら合わなくなってしまうている。

彼が、と言われても、私にはいない。

夫が、と言われても、私にはいない。

たとえば彼との結婚話が話題に出たとする。そんな時は既婚者に相談したいだろうし、既婚者も経験談を話せる。けれども私には、すごいね、おめでとう、と言う以外、出る幕がないのだ。

だから友人たちとは徐々に距離を取りつつ、代わりに一人での生活をどんどん充実させていった。

仕事もやりがいがあるし、早く終わる日はジムに行ったり、『てまり』で食事をしたり、万理さんに教わったレシピで常備菜を作ったり――という毎日を送っている。

一応、友人たちの動向を把握はあくするため……というか、付き合いの一環としてSNSを眺める。けれども私は取り立てて書くことがないし、書いたところで「いいね、独身貴族は」「ほんと！ 私なんて一人の自由な時間がなくて」――と余計な刺激を与えるだけなので、もっぱら読む専門となっていた。

ビールを呑みながら、スマートフォンを弄いじって日課のSNSサイト巡りをする。

それぞれの日常を切り取った写真と、それに続くどこまで本音かわからない賞賛コメントの数々。それらを、なかば義務的に追い、一通り読み終わるとスマートフォンをバッグにしまった。

常にテーブルに置いておくほど急ぎの用事はないし、SNSでの繋がりは、できるだけ離れていたいのだ。

「いらつしやいませ！」
 「いらつしやいませ！ 何名様ですか？ はい、ではコートをこちらでお預かりしますね！」

店は路地裏の二階というわかりにくい場所なのに、口コミで評判が広まっているのか、あつという間に席が埋まる。店主の万理さんはテキパキと配膳や調理をこなし、アルバイトの子も店内を行ったり来たりと大忙しだ。

そんな中、私は骨まで柔らかくなった秋刀魚の梅煮を堪能する。ついでに日本酒を注文し、どんどん盃を空けていく。

そうこうしているうちに店内の賑わいは落ち着き、何組かが退店していった。『てまり』は終電時間近くまでの営業なので、もう少して閉店だ。

私が一人暮らしをするアパートはこの店から徒歩圏内だけど、明日もあることだし、そろそろここを出なければ。

そう思いつつ、やつぱりあと一本いこうかな、とお酒を注文する。すると、万理さんがクスクス笑いながらキッチンから出てきた。

「綾ちゃん、駄目じゃない。軽く呑むって言うってたのに、これじゃいつもと変わらないわ」

「あれ、そうでした？」

「お酒好きだし、強いよね。私、綾ちゃんが前後不覚になるところ見てみたいわ」
 「家に帰らなきゃ、つて時はそれほど酔わないですね。でも、家呑みとか旅行先とか、寝る場所がちゃんとそこにあるつて時は……うっ、頭が！ 思い出したくないって言うてる！」

いまでこそザルと呼ばれる私だけど、お酒を嗜み始めた頃は潰れることが多々あった。いまでも布団などすぐに寝られる支度ができていると、かなり深酒をして、判断が鈍くなってしまう、そこは気を付けたところだ。

幸か不幸かわからないけれど、私は記憶をなくさないタイプだ。お陰で、それはそれは思い出したくもない黒歴史がずらずらと頭の中のアルバムに収められている。

しかも初対面の相手にはそれほど絡まないが、こと気を許した相手だと……うん。

地元の友達や会社の綿貫先輩は、私の酒癖を知っている。万理さんとは二度ほどお店の仕入れを兼ねた一泊旅行をしたけれど、この酒癖が発動するより早く万理さんが潰れたので知られていない。

……というか、万理さんと私は、いまだにお互いの苗字や住んでいるところを知らない。けれど不思議なことに、それがまったく気にならない。つまりそれらは、仲良くなる上で、どうしても必要な情報ではないのだ。こういうお付き合いは、気が楽なものがある。

会社からも自宅からも近くて、好みの料理を提供してくれるこの店を、私は第二の故郷のように思っている。だからこれからも足繁く通いたい。

「私は自力で帰らなきゃいけないから、外ではそれほど酔えないですけど、万理さんはいいですよね。いざとなれば、白馬の王子が来てくれるから」

「あははっ！ 白馬の王子って！」

万理さんは食器を片付けながら笑った。

その万理さんには、高校時代から付き合っている彼氏がいる。彼女は私より一つ上の二十九歳だから、もう十二年もの付き合いだ。ここに通うようになってから、私も何度かお会いしたことがある。仲睦まじい様子を見ているので、そんな相手がいるのっていいな、とちよつとうらやましく思っていた。

「ありがとうございました、またお越しく下さい！ ……でもさ、彼が白馬の王子だったら、私はとっくに結婚しているんだけどな」

会計を終えた客を送り出し、テーブルの上を片付けながら、万理さんはそうぼやく。

万理さんが結婚できないのには、彼女のお兄さんが独身であることが関係している。

万理さんの家はなかなか古風な考えをお持ちのようで、『妹が年長者の兄より先に結婚してはならない』と、ご両親からお許しが出ないらしいのだ。

「古いのよね、うちの親つて。あーあ、はやく兄貴が結婚しないかなあ」

溜息を零しながら、万理さんは店の外の看板をしまう。店内に残る客はいつの間にか私だけ。アルバイトの子も洗い物を終え、私にも一声掛けてから帰宅した。

「ねえ綾ちゃん、あとちよつとだけ呑も？」

「んー……一杯だけなら付き合う」

こうして、私的な飲み会へと移行した。口調もだいぶ砕けたものとなる。

「明日も彼の家に行くんだけどね……。むこうのご両親に、またせつつかれるのになつて、ちよつと憂鬱なの」

「結婚？」

「そう。すごくいい人たちで、私のことをもう家族の一員のように思ってくれているのはわかっているんだけど……」

万理さんは冷蔵庫の奥から取り出した特製の漬物を皿に盛り、店には出さない自分用の一升瓶をコップと一緒に持ってきた。お客さんに出す時は素敵な食器におしゃれに盛り付けるのに、自分のこととなると実用性重視になるのが面白い。

そうして万理さんはトクトクとコップに酒を注ぎ、「いただきます」と手を合わせて一口、二口と呑む。

「んん、おいっしい!! 綾ちゃんもどうぞ」

明日があるから、と控えていたけれど、なんだかんだでいつもと変わらぬ酒量になっ

ている。気にするのも今更なので、お言葉に甘えて一杯いただく。やはり——美味しい。「彼にね、『もいい大人なんだから自己責任』ってことで、うちの親には黙って籍入れちゃおう？」って私が言っても、ご両親にちゃんと認めてもらいたい、って言われちゃってさ」

万理さんはよく漬かったきゅうりをコリコリと食べながら愚痴を零す。

「結婚するのも大変なんですね」

彼氏すらいない私には、当たり障りのない相槌しか打てない。しかし万理さんは愚痴を言えば少しスッキリするようなので、聞き役にまわって盃を重ねた。

2

……呑み過ぎたかな。

翌日、目覚めた私はやや重い頭を抱えながら、家を出発した。

そして宿へと向かうべく、バス停で睨むように時刻表を眺める。

十一月ともなれば、そろそろ冷たい風が冬の訪れを知らせる頃だというのに、降り注ぐ太陽の光は、まるで夏の日差しのようなようだ。

昨夜は結局、夜遅くまで『てまり』にいて、いつもよりほんの少し多く呑んだ。

ほんの少し……うん、ほんの少しよね。ビールを三杯と、日本酒二合、ワインを一本……くらいだから、ね。

アルコールには強いが、旅行前日に呑む量ではない自覚はある。でも今日はバス移動だから、着くまでの間に少し寝れば大丈夫だろう。

これから向かう先は、同じ市内にあるけれど、ここよりうんと奥地にある温泉付きの民宿だ。一部屋ごとに離れになっていて、部屋専用の源泉かけ流し温泉もある。

綿貫先輩に紹介されて以来、一人慰安旅行の定宿となった。初めの頃は女一人だと傷心旅行に来て、なにかするんじゃないかと警戒されていた。でも、いまではすっかり顔なじみで、予約の時も名前を言えばすぐに応じてもらえるのもうれしい。

市街地からバスで一時間ほど揺られていると、窓の外には田畑が広がりが緑も濃くなる。徐々に道路も細くなり、のしかかるような木々の木漏れ日がキラキラと私を照らした。

行き交う車もまばらになり、くねくねと曲がる道に差し掛かる頃には昨夜の酒も抜け、今夜の食事に思いを馳せるまでに回復した。その土地の飾らない美味しさが楽しめる季節の料理に、また酒が進むのだ。

女将さんが漬けた自家製果実酒が美味しく、それも楽しみにしている。

この道の途中に、地元の人たちから教わったパワースポットがある。いつもはそこに

寄つていくのだけれど、今日はとてもそこまで体力が回復していないので、途中下車しないことにした。

やがて川端にあるバス停に着く。降りる客は私一人だけで、バスは地元の住人らしき二人を乗せて終点に向かって出発した。

あたりを見渡すとそこは道路と木と川だけ——つまり目印もない場所だ。初めてここに来た時はかなり不安を覚えたけれど、慣れたいまでは迷いなく歩ける。

着替え一式と洗面道具、それと部屋で呑む分のお酒と、簡単な化粧ポーチと文庫本一冊だけ入った小さめのポストンバッグを肩にかける。あとは財布しか入れていないシヨルダーバッグが私の持ち物のすべてだ。

川のせせらぎと、さわさわと耳に心地よい葉擦れの音を楽しみながら、私は胸いっぱい山の空気を吸う。五分ほど歩くと、舗装された道路から砂利道へ続く分岐があり、そこへ足を踏み入れる。砂利道を踏む音も仲間に加わり、一人でも賑やかな道中となった。

私を歓迎するように、秋の花々——コスモスやリンドウ、足元にはツワブキ、そして鼻をくすぐるこの特徴ある香りは金木犀だろう——が咲き誇っている。目や鼻でそれらを楽しんでいるうちに宿に到着した。

「こんにちは！」

古民家を改築したこの民宿は、引き戸を入ると土間が広くとられ、天井を仰げば梁がどっしりと横たわっている。どこかホッとする佇まいだ。

「いらっしやいませ。望月様、お待ちしておりました。いいお天気でよかったですね」「本当です！紅葉はどうですか？」

「山の上のほうは、だいぶ色付いてきたのですが、このあたりは来週……か、再来週くらいになると思います」

「残念です。またその頃、見に来ようかなあ」

「ぜひいらしてください。もう少し下った滝のあたりがおすすめですよ」

「わ！いいですね、楽しみ！」

にこやかに出迎えてくれた女将さんから鍵を受け取り、いったん母屋を出て離れへ向かう。今日泊まるのは、六棟ある離れの中で一番奥の、私の一番好きな部屋だ。

部屋に着くと、備え付けの冷蔵庫に持参したお酒を次々に入れていく。料理とともに酒を呑むのも好きだけれど、温泉に入ったあとで文庫本片手に酒を呑むのは最高の贅沢だ。

夕飯の時間までまだ充分時間がある。私は浴衣を手に取り、まずは温泉に入ることにした。この部屋には、とても眺めのいい露天温泉が専用で付いているのだ。

いつでも入れるという気安さから、ひとまず汗を流す程度に風呂を終え、浴衣に着替

えて髪を乾かした。それからくると髪留めのステイックでひとまとめにし、ポイントメイクだけ施す。

のんびり過ごしていたら、夕食開始の時間が近づいていたので、自室を出て大広間へ向かう。食事は部屋食ではなく、大広間で取る。囲炉裏のようなものが付いたテーブルが部屋数だけあり、それを囲んで鍋や焼き魚を楽しむのだ。

私は一人なので、自在鉤に鍋は吊るさず、鏝物でできた卓上コンロの一人鍋が用意された。夕食開始の時間早々に席に着くと、次々と目の前に料理が並べられていく。女将さん手作りの胡麻豆腐や里芋の田楽、鴨とキノコの鍋に、ムカゴとキノコの天ぶら、冬瓜と鶏だんごのスープ、銀杏のおこわなどなど、どれから手を付けようか悩むほどだ。

まずは食前酒として女将さんの漬けた夏ミカンの酒を頼み、鍋が煮えるまで天ぶらに手を伸ばす。ムカゴの天ぶらは、ほくほくとしている。一方のキノコの天ぶらは、噛む度にじゅわつと旨みが口いっぱいに広がった。

夏ミカンの果実酒は、爽やかな柑橘の味と苦味が癖になる美味しさだが、やつぱりビールが呑みたくなり、二杯目に頼む。

そうこうしているうちに、宿泊客がぞくぞくと囲炉裏を囲み始めた。

女性グループや夫婦などで席は占められ、一人客は私以外いない……かと思った

最後に大広間へやってきたのは、背の高い一人の男性だった。鴨居をくぐって部屋へ入ってきた彼の顔は、ここが山奥というのを忘れるくらい、都会的でとても整っていて、私好みの面立ちをしている。私と同世代に見えるその男は、この浴衣を着ていた。連れを待っている様子もないので、私と同じように一人で宿泊する客らしい。

彼は奥まった席へどっかりと腰を下ろし、用意された料理を食べ始める。

そこで、男がふっと私のほうに顔を向けたので、慌てて顔を伏せた。無意識に男を凝視していたようだ。そんな姿に気付かれたようで私は急に恥ずかしくなり、目の前の料理を平らげることに専念した。

数十分後、食事を終えたグループが次々と大広間をあとにする中、私はまだまだ呑み続けていた。だつて一人慰安旅行なのだ。呑まないでどうする。

女将さんも私が酒好きと知っているので、新作の果実酒や酒に合う漬物などを薦めてくれ、それがまた美味しくて更に酒量が増えた。

ここ最近、お仕事をものすごくがんばった。あちこち駆けずり回ったお陰でリーダー研修会の準備も一応の形が整い、直属の上司である鷹森部長の決裁も下りた。あとは週明けから始まる研修会が滞りなく進行するようフォローし、最後にレポートを書けば私の仕事は終わる。ちなみにレポートは、二年後にまた行われる研修会のための、引継

ぎ資料だ。

週明け——つまり、明後日あさっての月曜日から始まる研修会。それに立ち向かう英気えいきを養うべく、存分に楽しもうと思う。

ムカゴがもう少し食べたくなつたので、素揚げに塩を振ってもらうか、それとも茹ゆでただけのものをもらおうかと考えていたら、なにやら部屋の外が騒がしいことに気付いた。あの方向は玄関……かな？

よくわからないけれど、まあいいや。とりあえずお手洗てしういに行くついでに厨房ちゆうぼうで注文してこようつと。

よいしょと立ち上がったその拍子ひょうしに、テーブルのあたりでコツンと硬い音がした。なんだろうと腕を上げると、着物の袂たもとに入れておいた部屋の鍵が当たったことに気付く。うっかり落としたり困るし、他のお客さんもほとんどいないから取られる心配はない。

まだここにいるよというアピールのため、鍵はテーブルに置いて席を立った。

そうして用を済ませ大広間に戻ってきたら、なにやら女の人の怒る声が聞こえてきた。先ほど玄関のほうから聞こえた声の主かな、と察したが、できれば面倒事めんどうじに関わりたくないのので部屋の手前で止まり、こっそりと大広間を覗き見る。

するとそこには、囲炉裏いろりのテーブル席に座る男と、その傍そばで腰に手を当てて立ち男を糾弾きうたんする女がいた……なぜか、私の席に。

え、どういうこと？

私の席に座る人物は、大広間の端にいたはずの、顔がとても好きな男だ。

いやそれは置いておいて、その男が本来座っていたはずの場所を見ると、なぜか綺麗きれいに片付けられている。そして私の席に「最初から一緒に、ここにいましたよ」といった感じで男の皿や酒が移動していた。

なぜわざわざここに移つたのかわからないが、とにかく痴話喧嘩ちわげんかに巻き込まれるのは御免ごめんである。せつかくいい気分で呑んでいたのに台なしじゃないか。早くここから出て行こう。

残っていた人も私と同じ思いのようで、巻き込まれるのは勘弁かんべんとばかりに退散たいさんしていく。

しかし私は一歩出遅れてしまい……男と、女と、私の三人だけが残った。

部屋の鍵をテーブルに置いたままだったから、こっそり取って自分の部屋に逃げようと心に決め、大広間に足を踏み入れる。鍵さえ取り戻せばもういい。部屋で本でも読みながら呑み直そうかと思つたその時、ふと聞き慣れた声に気付いた。

「だから！　なんで急にいなくなつたのって聞いているのよ！」

この声は……

女はずっと男を責め続けていた。

「今日こそはって言ったじゃない！ 折角、候補を集めたのに見もしないの？ ああもう！ 私には時間がないのよ。お願いだから、ねえ！」

「無理なものは無理だ」

「なんてすって!？」

一方的に女が責めているかのように見えたけれど、どうやらそうでもないらしい。男の声に誠意がまったく感じられないからだ。

女性のほうは、どことなく私を知っている人物に雰囲気似て――

「あれ……もしかして、万理………さん？」

「……っ！ あっ、えと、ええ？ 綾ちゃん？ どうしてここに!？」

思ったことをそのまま口にしたら、それを聞いた女が弾かれたように顔を上げた。

声の主は、昨夜一緒に呑んでいた『てまり』の店主、万理さんだった。山奥のこの民宿にいたとは予想外だけれど、それは万理さんも同じな様子。

なぜか男のほうも啞然としていたが、万理さんと私を交互に見比べて一人なにか納得している。

「今日から旅行って、昨日万理さんに言ったじゃないですか」

「えー！ 綾ちゃん、この民宿に来るつもりだったの?」

「前に話したことありませんでした？ 私、いつもここに来てるんですよ」

きゃつきゃと話し始める私たちに、男がゴホンと咳払いをした。

あっ、そうだった。二人の話を邪魔してはいけない。

「それじゃ私はこれで――」

その場を離れようとしたところ、がしっと手首を掴まれた。やけに無骨な指だと思しながらその先を辿ると、男が私の手首を握っている。

「望月さん、折角だから妹と一緒に呑まないか」

「えっ！ 兄貴いったいどういうこと?」

手を掴まれたまま名前を呼ばれ、更に妹と一緒に、と言われて私は混乱した。どなたですか、この方は。

状況から察するに、とりあえず男は万理さんの兄らしい。ということはこの二人は兄と妹――ということになるのかな。

それはかろうじて理解した。だけど、なぜ私の名前を知っている？ 万理さんのお兄さんとは初対面なのに、突然一緒に呑もうと言われても警戒しできない。

「万理、この人は俺と同じ会社の望月綾香さんだ」

「はっ?？」

「えっ?？」

目を丸くする私と万理さんを無視して、男は話し続ける。

「まだバスの時間あるだろう？ 万理も折角だから一緒に呑もう。今夜はそれで勘弁してくれ」

朗らかな笑みを浮かべ、お兄さんは万理さんを誘う……私、込みで。

「一緒に、ちよつと——」

抗議の声を上げかけたけれど、万理さんは「いいの？ やったあ！」と声を上げた。

「綾ちゃんがいるなら、私も呑もつかない。もちろん兄貴の奢りで！」

私は断りたい気持ちでいっぱいだった。しかし楽しそうに同席の準備を始めている万理さんを見たら、今更断りづらくなる。だから、少しだけなら……と観念して、しぶしぶ彼の隣に座る。それを見て、お兄さんはようやく私の手を離してくれた。

私の内心を知らない万理さんは、ニコニコとメニューを取り出して選んでいく。

「それにしても綾ちゃんてば兄貴と同じ会社だったのね、知らなかった」

そう言うって首を捻りながらも、呑むことと食べることが大好きな万理さんの意識は、すっかり宴会モードに切り替わっている。厨房にいる女将さんに注文を伝えるため席を立った。

「ま、万理さん、待って」

そんな彼女の様子は微笑ましいけれど、私はそれを黙って見送っている場合ではない。万理さんがこの場からいなくなると、二人きりになってしまうのだ。この、よく知らな

い男性と。

しかし万理さんには聞こえなかったようで、さっさと部屋を出て厨房に行ってしまった。

気まずいながらも、顔を上げて恐る恐る疑問を口にした。

「あの！ どうして私の名前を」

「しーっ！ 万理に聞かれるとマズい。……悪いけど、俺の話に合わせてくれないか」

猛然と抗議しようとしたら、私のほうに身を寄せ、こそこそと話してきた。

「話を合わせるって……。あの、あなたが万理さんのお兄さんというのはいわわわわわわが、いったいどういうことですか」

話がまったく見えない。

「俺は紅林——紅林哲也だ。同じ会社の支社に勤務していて、今度本社の研修会に参加する——」

「あつ！ ……もしかして、主任の紅林さんですか」

彼のフルネームを聞き、ようやく私の記憶のページが開いた。

来週から開かれるリーダー研修会のために、紅林さんとは幾度となくメールや電話をしてきた。そうとわかれると、確かにこの声には聞き覚えがある気がしてくる。

低めのバリトンボイスで艶があり、電話の度に耳がくすぐったくて。電話を取り次ぐ

女性たちからもときめきの声上がり、非常に人気が高かった。

二年前も研修会に参加していたらしいけど、私は綿貫先輩の代わりに社外へ出ることが多く、出席者の顔を見る機会がほとんどなくて覚えていないのだ。

ともあれ、二回連続で研修会に参加できる人はなかなかいない。とても優秀な人物にのみ、特例として認められていることだと聞いたことがある。つまり、紅林さんもそうなのだろう。

そんな紅林さんがどうしてこの場所にいるのか、そしてどうして私に話を合わせてほしいなんて言ってくるのか……訳がわからない。

「明後日からの研修よろしく。……ま、つまりその研修のために実家に戻ったら、万理が見合いしろって煩くてね」

「ああ……」

万理さんが親から結婚を許してもらえない原因になっているあの兄か。

「だからここへ？」

「そう。逃げ出すなんて格好悪いけど」

ふ、と尻を下げて笑う。

……そんなこと言って。めちゃめちゃ格好いい人が、こんな笑い方するなんてずるい。それを見て私は、胸が甘く騒めくのを感じた。

「研修期間は忙しくて結婚の話なんて聞いていられない、って突っぱねてただけど、その前ならいいと思ったんだろうな。家に帰ってすぐ、見合い写真やら釣書を持ってくると言い出したから隙をついて家を出た」

「でも見つかってしまいましたね」

「おかしいな、まいたつもりだったんだが」

難しい顔をして首を捻る紅林さんだけど、あ、と気付いたように声を上げる。それから、ふたたび声を潜めた。

「そこで君に頼みたいのは、もともと俺と知人だということにしてほしいんだ」

意外な申し出に、私はなんと答えたらいいかわからない。知人だとして、どういう意味があるのだろうか。不審な顔をする私に、彼は更に顔を近付ける。

「そうだな……共通の友人を巻き込もう。——綿貫からこの宿を紹介され、お互い同時に泊まったに過ぎない。だけどこの大広間で会って、知らぬ仲ではないから研修会の話をしながら一緒に呑んでいた、ということはどうだ」

突然、綿貫先輩の名前が出てきたことに驚きつつも、確かに私は先輩からこの宿を紹介されたので嘘ではないな、と考える。それに紅林さんとは、業務上だけメールも電話もしたから、広い意味で知人……でもある。

「まあ……そのくらいならいいですけど」

今更無理だと言いつら、知人程度ならと受け入れた。研修会の前に、変な採めごとを起こしたくないという社会人としての意識も働いた結果だ。

「よかった、ありがとう」

紅林さんは心底ほっとした顔を見せる。その表情は、まるで身内に見せるように気を抜いたもので、一瞬見惚れてしまった。慌てて「ど、どういたしまして」と言い、焦りながら、腰に置いていた手をもじもじと動かす。

そこへ、「おまたせー」と言いながら、万理さんが戻ってきた。手には複数の酒瓶、そして腕に載せたトレイには、コップや氷が山盛りのアイスペールが置かれている。

「あと私たちだけだし、適当にしていっていいから借りてきちゃった。あ、この古漬けはサービスだつて！ ささ、呑も呑も！」

女将さんと色々話を付けたらしく、万理さんはてきぱきと場を整えていく。

タンタンと囲炉裏テーブルに酒瓶などを並べ、返す手で空いた皿をトレイに載せる。

そしてそれらをまた厨房に運び、戻る時には今度はスパークリングワインを持ってきた。

「これ最初に呑もうよ。兄貴、支払いよろしくね！」

「お前……まあいい、好きにしろ」

二人の気安い口調に、なぜか私の頬は緩んだ。なんか、いいな。私は一人っ子だから、兄妹のこういう関係に少し憧れていた。

「さ、それでは改めて！ 乾杯！」

注がれたワインをそれぞれ手に持ち、万理さんの音頭で乾杯する。

それからは、あつという間だった。瞬く間にワインの瓶が空き、一升瓶が空く。

三人とも酒に強く、最近の仕事についてや万理さんののろけ話で会話が弾んだ。

しかし、二本目の一升瓶の栓を開けたところで、万理さんが「あつ！」と言い立ち上がる。

「バス……」

その一言に、私も紅林さんも同時に壁掛け時計に視線をやる。時刻はバスの最終便をとうに過ぎていた。

あまりにも楽しくて、時間を忘れてしまったのだ。

「ごめんなさい万理さん。気付かなくて……」

「すっかり忘れてた……でもまあいいか。兄貴、泊めてくれるでしょ？」

「……わかった」

しぶしぶといった様子だけど、彼は泊まることを了承した。万理さんは兄と一緒だからと彼氏に電話し、紅林さんも電話を代わって説明する。嫁入り前なので、心配をかけないためだろう。優しい兄の心遣いを見て、私は密かに感動していた。

「じゃ、これで心置きなく呑めるね！」

そんな兄の気持ちなど露知らずといった様子で、万理さんはニコニコと新しい酒瓶を持ってきた。

「呆れたやつだな」

と言いつつも、コップを差し出す紅林さん。私もまだこの時間が続くことをうれしく思い、同じくコップを差し出した。

そして――

二本目の一升瓶を空けたところで、万理さんの目が据わりだした。かなり酔いが回っているらしい。

「だから……兄貴は、さっさとお、結婚しろー！」

「はいはい」

「ハイハイじゃなーい！ あたしは、二十代のうちに、結婚したいわけよ！ 博さん
てば転勤になるって言うじゃない？ あたしは結婚して付いていきたいの！」

「はいはい」

「もー、すぐそうやって流そうとするー！ あたしはあく時間がなくなったのー！ 兄
貴、誰かいないのー？ せめて付き合っている人とかさー、いい感じの人とかあ……
ねー」

囲炉裏テーブルに突っ伏しながら、万理さんはぼやき始めた。博さん、とは万理さん

が十二年付き合っている彼氏で、フルネームは杉山博という。

そろそろ引き上げ時かな。時計を見ると、二十二時を回ったところだ。

――夕食は早めの十七時からだから、えーと……五時間ほど、ずーっと呑み続けていたってことよね。我ながら、よく呑んだと思うわ。

普段はふわふわと気持ちいい程度だけど、さすがに私も酔いを自覚し、眠くなってきた。

紅林さんもお酒は強いようだけど、あくびしている。

「さあ、そろそろ部屋に行こう」

空の酒瓶をつついていた万理さんは、紅林さんの声を聞いた途端、がばつと身を起
こす。

「そうだ！」

突然大きな声を上げた万理さんは、なにか思いついたらしく、そうだ、そうだ、と何
遍も繰り返しながら、にんまりと口角を上げる。

そして、私と紅林さんを交互に見比べ、うんうんと頷いた。

「兄貴と綾ちゃん。今日から婚約者ねー。きーまりっ！」

「えっ」

「待て、どういうことだ」

万理さんは、それがいい〜！ と膝を叩く。

「だ〜からさ〜、兄貴と綾ちゃんが婚約者ってことになれば〜、あたしね〜、あたし〜……、結婚できると思うの〜」

「ちよっと、万理さん？ 婚約者って……あの……」

「二人が知人だ〜ってことはさ〜。だからね〜、い〜こと思いついちゃったの〜」

万理さんは、べちべちとやる気のない拍手をしながら、ケラケラと笑い出した。

「博さん、転勤になるって。……これ本当のことだし……アハハ」

「いつだっけ、その転勤まで」

「うん……三ヶ月後にね。あたしは彼に付いていきたいんだけど……兄貴の結婚を待ってたら〜、あたしは三十歳になっちゃう。それどころかさ〜、このままでできない可能性だつてあるよね……でも、あたしは彼と結婚したい……せめて、せめて三十歳までには、籍を入れたいの！ だ・か・ら！ 兄貴に婚約者よ！」

ちよっと静かに聞いてて、と釘を刺されたので、私も紅林さんも黙って次の言葉を待った。

「二人を婚約者ってことにしておけば、うちの親は渋るだろうけどあたしの結婚を許してくれると思うの。長く延ばしてきた負い目があるだけにね。——兄貴も」

万理さんは紅林さんに対して、自分のためにいい加減な結婚をして欲しくないと思っ

つつ、だけど早く相手を見つけて欲しいと願っていた。私はその気持ちを知っているだけに、胸の痛む話だ。

はあ、と深い溜息をつきつつ、次の言葉を万理さんは口にする。

「こんなこと頼むの、申し訳ないと思うけれど……綾ちゃん、うちの馬鹿兄貴と婚約して！」

「ちよ、ちよっと！ こ、こん……婚約!?!」

「あ、ちよっと違うわ。ええと、婚約者のふりをして！ お願い！」

婚約者のふり？

唐突な申し出に、まるで意識がついていかない。なぜ私が紅林さんと婚約者のふりをしてなければならぬのか……

混乱する私の隣で、紅林さんは腕を組んで難しい顔をしながら要点をまとめた。

「つまり俺は、つい最近付き合ひ始め、結婚を約束した婚約者がいる。いずれ結婚するつもりだが、仕事の都合もありますぐにというわけにはいかない。けれど、万理の年齢もあるし、俺に決まった相手もできたことだし先に結婚させてやってくれ……と、口添えしろということだな」

「さつすが兄貴！ 話が早いわ！ ねえ綾ちゃんお願い、しばらくの間……ううん、あたしが籍を入れるまで婚約者のふりをして！ 彼の転勤先での任期は五年……しかも遠

距離って、つまりもう付いていくか別れるかになると思わない？ あたし、彼の転勤にどうしても付いていきたいの。こう言っちゃなんだけど、兄貴ってばそれなりにスペックは高いと思う。おんなじ会社ならわかるかな？ 主任クラスから、お給料がドーンと増えていくのよね。それに優しいし、そこそこ貯めこんでいると思うの。あたし調べでは、それなりにモテてたはずなんだけど、この年まで結婚に至らなかった兄を、どうせならもらってちょーだい、綾ちゃん！」

立て板に水、といったようにズラズラズラつと勢いよく言われ、思わずのけぞった。「なっ！ なにを!!」

「おっと、あたしの希望を言っちゃった。ええと、ふりね、婚約者の、ふり！ ほんのちょっとの間だから！ ね、お願い！」

「万理……俺が研修でここにいるのは二週間だぞ」

「あっ、そうか。じゃあ、あたしのほうを二週間でなんとかするから！ お願い！」

二週間でなんとかなるものなの？ いままでずーっと兄のために結婚の許可を出さなかったご両親が、そんな短期間で首を縦に振るとは思えないんだけど……

助けを求めるように紅林さんへ顔を向けると、心底弱り切った表情で頭のうしろをガリガリ搔いている。

「俺は待たせて悪いと思ってるし……頭ごなしに拒否しづらいな」

紅林さんは、高校時代からずっと妹が一人の男性と付き合ってきたのを知っている。

結婚の話も出ているのに、自分のせいで結婚を随分待たせてきた自覚もある。それを心苦しく思う気持ちはあるけれど、かといって適当な相手と結婚することはできない。だから——賛成はできないけど、反対もできない、といったところだ。

「私は……」

正直な気持ちを言えば、断りたい。しかし、普段から世話になっている万理さんだ。

一人暮らしの私の体調を気遣って、栄養満点な惣菜を持ち帰らせてくれたり、こちらでの生活や仕事の愚痴を聞いてくれたりと親身になってくれた。

断りづらい……というか、ほんの二週間だけなら、恩返しのためでも受けてもいいかな、と思いはじめた。なにより、杉山さんに転勤の辞令が下りてしまったいま、時間が無い。

紅林さんとは、社内で連絡を取り合う仲で、まったく知らない人ではない。なにより万理さんのお兄さんで、今日初対面にもかかわらず、とても楽しくお酒が呑めた。

ほんの二週間だけなら……大丈夫よね？

「……わかりました」

決意を胸に、万理さんに伝える。

「たいしてお役に立てないかもしれないけど、よろしくお願いします」

すると、万理さんは突然涙をぼろぼろと零した。

「あー！ 綾ちゃん！ うれしい、うれしい！」

「ちよ、ま、万理さんっ」

「兄貴の婚約者ああ」

「ふりですから！ あくまで!!」

「うわあ〜ん！」

それまでの苦勞が蘇ったのか、万理さんは泣きじやくりながら私に抱き付いてきた。私より一つ年上で、普段はキリッとしていて姉御肌だけど、かなり溜め込んでいたのだろう。子供のように感情を露わにしている。

私もぎゅっと抱き返し、万理さんの結婚がうまくいくように願った。

大広間の片付けはそのままでもいい、とは言われていたけれど、囲炉裏テーブルの上は綺麗に片付け、食器などはすべて調理場に下げておいた。

そうして私と紅林さんは、酔いつぶれた万理さんを間に挟み、よたよたと紅林さんの部屋を目指す。万理さんを早く布団に寝かせてあげたい。

幸いにも彼の部屋は大広間から一番近い場所だったので、すぐに到着した。

「万理、着いたぞ」

「ん〜？」

ぼやんとした顔で、それでも頬は緩んだまま万理さんは返事をした。紅林さんは、浴衣の袂から部屋の鍵を取り出す。すると、それを万理さんが手を伸ばして奪う。

「あたしが〜あけちゃうよ〜」

万理さんは私たちから体を離すと、部屋の鍵を開け、引き戸の中に体を滑り込ませた。万理さんに続いて紅林さんも入ろうとしたところ——鼻先で戸が閉まり、ガチャッと音がした。

「えっ」と、私と紅林さんは顔を見合わせる。

万理さんは、酔っているように見えてそこそこ意識がしっかりしてるのかなと思っていた。だから私は彼女の行動をただ見守っていたのだけれど、いまの遮断された音は……。わかったけど、わかりたくない事態に気付く。

「お、おい、万理！ 万理、これはなんの真似だ！」

紅林さんが、戸を開けようと試みるが、ピクともしない。

すると内側からあくび混じりの声が聞こえた。

「兄貴〜、あたしは〜自分の部屋で寝るね〜……」

「待て、違うぞ、ここは俺の部屋だ！ おい万理!!」

「おやすみ〜」

と声が聞こえたのを最後に、もう部屋の中から返事がない。

あれだけ酔っ払っていたので、あつという間に夢の中へ旅立ったに違いない。

「万理！」

それでもなんとか開けさせようと紅林さんは戸に手をかけるが、私はそれを止めた。

「紅林さん、もう遅い時間なので他のお客さんの迷惑になりますよ」

「いや、しかし……」

困るのには理由がある。まず第一に、紅林さんはこの部屋に荷物があるということ。財布だけは持っていたものの、着替えなど入れたバッグをすべて置いて置いている。そして二つ目に、この民宿が今日は満室だということ……新たにもう一室借りて泊まることはできないのだ。

事情を話せば、この部屋の手備の鍵を使って開けてくれるかもしれないけれど、私たちが大広間にいた時から、女将おかみさんは奥の部屋に引っ込んでいた。

こんな私たちの、酔っ払いの失態しつたに付き合わせるの気が引ける。

かといって、アルコールが入っているので車の運転はできないし、タクシーや代行を呼ぼうにも、ここはかなりの山奥な上に、今日は週末だから「みんな出払っている」など適当な理由をつけて体ていよくお断りされるだろう。

二人でああでもないこうでもない話してみたけれど、解決の糸口は掴つかめない。

「万理さんが自発的に起きてくるのを待つしかないですね……」

「そうだな」

紅林さんは、はあ、と眉間を押さえながら溜息ためいきを一つ零す。それから、くるりとうしろに身をひるがえし、歩き出した。

「えっ、あの、紅林さんどちらへ」

慌あわてて声をかけると、いったん立ち止まって首だけ振り向く。

「仕方がないから、大広間の片隅にいさせてもらおうかと」

あの大広間ならいることは可能だけれど、囲炉裏いろりテーブルだから寝るのにはまったく適さない。徹夜するにしても、秋とはいえ山奥はとて冷え込むのだ。つい心配になって引き留める。

「もし……あの、もしよろしかったら私の部屋にいらっしやいませんか」

「ん？」

「ええと、その、私の部屋なら暖房器具がありますし、お布団も一応二組……」

見ず知らずの男性——ではないが、自分一人だけが泊まる部屋に誘うのはどうかと思う。ただ、このまま知らないふりもできない。

そう申し出ると、彼は最初、いや、でも、と遠慮えんりょしていた。けれど、私が更に強く誘うと、ようやく首を縦に振った。

「じゃあ……すまない、お邪魔させてもらうよ」

私^{わたし}が先導し、飛び石が程よく配置された渡り廊下を歩いていく。あたりはとつぷりと闇に包まれていて、足元の電燈^{でんとう}が温かく道を照らしている。

一番奥の部屋に着き、鍵を開けて部屋に入ると、畳^{たたみ}の匂いが体を包んだ。

「適当に座っていてください。——あ、もう少し呑みますか？」

備え付けの冷蔵庫に、持ち込んだお酒がある。食事が終わったら部屋に戻って、本を読みながら呑もうと思っていたのだ。

まさか大広間であれば呑むとは思ってもみなかったので、持ち込んだお酒はそっくりそのまま残っている。

「そうだな、ちょっと呑み直したい」

「はい、じゃあちよっとお待ちくださいね」

棚の上には小さめのコップが二つ、お盆に伏せて置かれている。冷蔵庫から缶ビールを一缶取り出し、いったんひっこめた手をもう一度冷蔵庫に入れて、もう一缶お盆に載せた。だって紅林さんと一緒なら、一缶なんて隣殺^{しめころ}だろうから。

なんで部屋に入るなり呑もうと誘ったかというところ——間^まが持ちそうにないから。

男女二人きり、それも今日初めて対面したばかりなのに、いきなりこんな展開になってしまったのだ。素面^{すめん}では気まずい。酒を呑んでいれば、それなりに会話を進めること

ができそうだと思った。

お盆を持って座卓まで運ぶと、コップをそれぞれの前に置いて缶を開け、二つのコップに注いでいく。

「じゃ、乾杯ということだ」

「二次会だな」

「ふふっ、そうですね」

触れるだけに留めたコップが、コチ、と鈍く鳴る。私の視線はその振動を感じた途端^{とたん}、紅林さんのコップを持つ手に吸い込まれた。

小さめのコップが、更に小さく見えるほど大きな手——

ゴツゴツと骨張り、指の先までいかにも男らしさを感じる。

「——どうした？」

先にビールを呑み干した紅林さんが、コップを持ったまま動きを止めた私を訝^{いぶか}しき声をかける。

その言葉に、はっと我に返った私は、「い、いえ、なんでもありません！」と手に持ったビールを一気に呷^あった。

「ハイハイ、次！ コップこっちに置いてください！」

二缶目のビールを慌^{あわ}てて開け、空いたコップ二つに注いでいく。

——彼の手を見て、男の人だ、って意識してしまったなんて、言えない。

改めて正面に座るこの人が、万理さんの兄とか同じ会社の人とかという以前に、
眉目秀麗で……そして『やたらと声が腰にくる』と会社で噂になっていた男性なのだと思いついた。

その人が、目の前にいる。

「く、紅林さんてお酒強いんですね。びっくりしちゃった」

私は注いだばかりのビールをまたも一気に呷り、立ち上がって冷蔵庫からワインを持ち出した。部屋に着くなり冷やしておいたので、やけに火照っているいまの体にはちょうどいい。

「それを言うなら望月さんこそ。あ、俺がやるよ」

ワインのコルクがうまく抜けなくて、紅林さんにお任せする。

「でも、わりと酔っているかもです。ほら、現に力が入らなくて」

「それでもすごいと思うよ。女性でこれだけ呑める人、初めてだ」

「呑める女は、お嫌いですか？」

「いや、むしろ好きだよ」

ハハハ、と笑ってワインを注いだコップを持ち上げる。しかし私は、どうにも動悸が治まらない。

——むしろ好きだよ。

——好きだよ。

呑める女が好きかどうかと聞いたことに答えただけで、深い意味はない。

そう自分に言い聞かせるものの、男性とのお付き合いに枯れて久しい独身女には、その言葉は刺激が強かった。

深い意味はない。もう一度そう胸に刻みながら私もワインを呑んだ。

「話が合って、食の好みが似てて、一人を謳歌している。そういう人が好みだからな」

……ん？

「丁寧に書類を整え、資料にはわかりやすく図をつけるなど気配りができ、更にはとてもかわいらしい声ではきはきと話す。そんな彼女に会ってみたかったし、こうして実現できたのはうれしい」

……え？　なんだろう、急に、なにか、雰囲気……

「その上、妹の頼みを聞いてくれて。……期間限定とはいえ婚約者になれたのは光栄だな」

……あの？

勘違いしないようにと必死に考えるけれど、どうしても私のことに聞こえて仕方がない。

いやいや、まさかまさか。

「だいぶ酔っておられますね。私はまだまだですよ！」
タン、とふたたびコップを空にしてテーブルに置き、紅林さんにワインを注ぐよう促した。

目の前の色男が、突然自分を褒め出し、あまつさえ婚約者になって光栄だとか、なんの冗談だろう。彼は、平気なふりしてだいぶ酔いが回っているようだ。これ以上、惑わされるのは嫌なので、ここは潰すに限る。

紅林さんは私のコップに、トクトクと音を立てながらワインを注いだ。

「酔ってなんかいないよ。俺は綾香に興味があったから」

「あの、いきなり名前で、しかも呼び捨てはやめていただけませんか」

「婚約者だからいいだろう」

「紅林家の御両親の前だけだと認識しておりますが！」

「俺はこれが本当になってくれるとうれしい」

「……はっ？」

持っていたコップを危うく取り落とすところだった。

いま、なんて言った？

「本当って……」

「結婚しよう」

「……っ!? あ、の……? 婚約するふりなら、しますよ」

「だから、本当に……年前からずっと……」

「えっ？」

あまりよく聞こえなかったけれど、これは駄目だ、紅林さんは相当酔っていらっしやる。

顔色一つ変えず冗談が言えるなど、タチの悪い酒癖だ。

もうここはさっさと布団を敷いて寝てしまおうべきか。

「理由ならある。綾香の仕事の誠実さと、万理から聞いていた可愛い常連さんの情報と、あとは……前に食べた——」

「はいはい。それじゃ、お布団敷きますので支度済ませてくださいね。洗面所に予備の歯磨きセットがありますから」

適当に返事をしつつ寝る準備をさせようと声をかける。それから私はコップ一杯分のワインを、ごくごくと水のように呑み干した。

紅林さんはブツブツ言いながらも洗面所に行ったので、その際にと布団を敷き始める。一組はもう宿の人が敷いてくれていたけれど、紅林さんの分は自分で敷かなければならない。

使っていた座卓を移動させて二組の布団の間に置き、仕切り代わりとする。それから敷布団、シーツなどテキパキと準備した。そして紅林さんが戻ってきたのと入れ替わりに、私も洗面所へ行く。

顔を洗ったり歯を磨いたりと寝支度を整え部屋に戻ると、すでに部屋は暗くなり、枕元に置かれた小さなライトのみが灯っていたが、紅林さんは座卓の前に座っていた。

「もう一杯だけ呑みたい」

あれだけ呑んでまだ呑むか、と一瞬思ったけれど、呑んで潰れてくれたら助かる。

「……じゃあ、少しだけ」

一応渋るふりを見せながら、しかし結局自分ももう一杯呑もうとしているのかもしれないと思う。

冷蔵庫に置いてあるのは、もう日本酒のワンカップ引き酒三本セットだけだった。これなら少量でちょうどいいかなと手に持ち、座卓に並べる。

「隣、座らないか」

「いえ、こちらで」

隣に座るのは危険な気がする。しかし対面になるのもあからさま過ぎかと思い、机の角を挟んではず向かいに座ることにした。

「改めまして、乾杯」

一つを紅林さんへ、もう一つは自分の前に置き、ワンカップのふたを開けて乾杯する。最初の一口はすぐに呑み込まず、鼻に抜ける匂いを楽しんでから喉に流した。

「んー、これ好みですね。キツさがなくて」

「こっちも割と尖りが少ない気がする」

「味見させてください」

そう言って交換し、呑む。うん、これも大変美味い。

……って、あれっ？　なんで私はこんなことをしているんだろう。ついさっき、危険過ぎると思ったばかりなのに、回し呑みするなんてこの警戒心のなさはなんだ。

「あーこっちも好みです。一升瓶で欲しくなっちゃった」

「蔵元は県内にあるから今度連れて行くか？」

「わっ、うれしいです！　ぜひお願いします！」

ちよっと待って、なんで私はこんな約束しているの？

「それにしても、どうしていままで結婚しなかったんですか？　万理さん可哀想」

待って待って、なんで私……！

頭の片隅で必死に制止するものの、滑る口は止まらない。

「こんなカッコいいんだから、モテてモテてよりどりみどりでだろうし。それなのに万理さんを十二年も待たせて。……その間に、なんとかならなかったんですか？」